

## 第二章 『白氏文集』・『古今集』・『伊勢物語』と仏典

### ——浄土思想と『涅槃経』と——

#### 第一節 白居易と唐代仏教——禅浄双修思想を手がかりとして

##### 緒言

白居易と仏教の関わりは、三十歳の頃東都の凝公に参じて禅を修し、江州司馬時代、南宗禅に傾倒するとともに浄土信仰（弥陀信仰）が萌し、晩年は、禅に対する求道的態度を継続しつつ、洛陽、香山寺を修復して香山居士と称し、来世を願う浄土信仰、弥勒信仰が深まっていったとされる。<sup>(1)</sup>とくに晩年の白居易について、篠原寿雄氏は、親友元稹、劉禹錫らの死に直面し、さらには愛息阿崔まで失う辛い経験を契機として、浄土信仰（阿弥陀信仰、弥勒信仰）に傾いていったことを、「禅と浄土が心の奥底に混在している、信仰の統一性を問わぬ居士の歩みである」として捉える<sup>(2)</sup>が、孫昌武氏は、居易が実践面で遵守するところは洪州宗の禅であったが、禅宗の見性思想と根本的に対立する浄土信仰にまで心を傾けるのは、彼の仏教思想の雑駁性によるものとする。<sup>(3)</sup>孫氏は、禅宗はその誕生以来浄土の存在を全く認めていないとするが、篠原氏は、晩年の白居易における禅と浄土信仰双方への傾倒は矛盾であるとしながらも、一方で彼のこうした歩みは、出家者にもみられるとして二つの例を挙げる。一つは、南陽慧忠が、念仏して深く往生を進め、百丈懷海が彼の入寂に際して、弥陀を唱え、ことごとく浄土に帰せしめんとしたという逸話である。<sup>(5)</sup>禅の五

祖弘忍門、慧能の弟子とされる南陽慧忠の入寂に際して、洪州禪の僧、百丈懷海が、弥陀を唱えたというのである。南陽慧忠は七七年寂であるから、七七二年生の白居易の一世代前の人物、さほど離れた時代のことではない。二つ目の例は、入矢義高氏が、敦煌、スタイン本に「十勸鉢禪関弥陀仏和」という中唐頃の参禪を勧める歌があるが、「弥陀仏和」とは「弥陀仏」という和声を唱える意味であり、「弥陀仏」の唱和を伴って歌われる参禪を勧める歌とは、禪と浄土の結びつきを示すものではないかとされたものである。短い箇所のだが、これは非常に重要な指摘である。以下、篠原氏の驥尾に付して、白居易と、彼が交誼を結んだ僧における禪と浄土信仰の問題を考えてみたい。

### 一 廬山仏教と白居易

白居易が、江州司馬時代、度々廬山を訪れて、東西二林寺の禪宗の僧侶たちと交流したことはよく知られており、関連する先行論文も多い。<sup>(6)</sup> 浄土思想に関わるものでは、居易が、東林寺、西林寺に遊んだ喜びを詠った詩の一節に、東晋の慧遠を中心とした、東林寺の白蓮社の十八賢が西方往生を誓ったという伝説に則って、「緬彼十八人、古今同此適〔緬かなる彼の十八人、古今此の適を同じくす〕」〔春遊西林寺〕『白氏文集』・〇二九二と、彼らと結社を作って西方往生を祈願したことを語っていること、またその一員であった興果上人(神湊)が没した時には、

興果上人歿時題此決別兼簡二林僧社〔興果の上人歿せし時、此を題して決別し兼ねて二林僧社に簡す〕

本結菩提香火社 本菩提香火の社を結びしは

為嫌煩惱電泡身 煩惱電泡の身を嫌ひし為なり

不須惆悵從師去 惆悵して師にしたがって去るを須ひず

先請西方作主人 先ず西方の主人と作るを請へばなり

〔『白氏文集』・一〇三八〕

と、居易が興果上人と「香火社」という結社を結び、亡き上人が彼より先に西方浄土の主人となって待っていてくれ

るように願う詩を作っていることが挙げられるだろう。興果上人(神湊)は、「唐江州興果寺神湊伝」〔宋高僧伝〕卷十六)によれば、洪州禪、馬祖道一に師事し、「詔して九江興果精舎に配す。後に僧の望みに従って東林寺に移居す。即ち雁門賈遠の旧道場なり」、九江の興果精舎にいたが、自らの望みで、雁門の慧遠の旧道場である東林寺に移ったとあり、浄土教の祖である慧遠に対して深い崇敬の念を抱いていたことが伺える。とくに後者は、二林(東林・西林)寺の僧侶に宛てて詠まれたものであるから、洪州宗の興果上人が西方浄土往生を願ひ、それを二林寺の僧侶が許していることになる。その一年前に白居易は、

臨水坐 水に臨んで坐す

昔為東掖垣中客 昔は東掖垣中の客と為り

今作西方社内人 今は西方社内の人と作る

手把楊枝臨水坐 手に楊枝を把って水に臨んで坐し

閒思往事似前身 閒かに往事を思へば前身に似たり

〔『白氏文集』・九八二〕

と、西方社という結社の一員となったという詩を作っている。西方往生を連想させる西方社の実体と香火社の違いははっきりせず、あるいは香火社の異名であったかもしれない。

春憶二林寺旧遊因寄朗・満・晦三上人〔春二林寺の旧遊を憶ひ、因って朗・満・晦三上人に寄す〕

一別東林三度春 一たび東林に別れて三度の春

每春常似憶情親 每春常に情親を憶ふに似たり

頭陀会裏為通客 頭陀会の裏通客と為り

供奉班中作老臣 供奉班中老臣と作る

清浄久辞香火伴 清浄久しく辞す香火の伴

塵勞難索幻泡身 塵勞索め難し幻泡の身

最懃社題橋処 最も懃ず僧社橋に題せし処

十八人名空一人 十八人名は一人を空くを

〔白氏文集〕・二二一九

廬山の東林寺と別れて三年、春になるたびに肉親や親友をしのぶように東林寺を懐かしく思い出す、今は宮廷の供奉官僚グループの年老いた陪臣になってしまい、東林寺の清浄な仏門の仲間たちに別れて久しくなつた、とりわけ懃ずかしいのは、かつて僧侶仲間で香火社の同士の名前を橋梁に書き並べた折、その十八人のなかで、俗界に去つた一人の名が消されてしまったことだ。この詩は、

独在異郷為異客 独り異郷に在りて異客と為る

每逢佳節倍思親 佳節に逢ふごとに倍親を思ふ

遙知兄弟登高処 遙かに知る兄弟高きに登る処

遍插茱萸少一人 遍く茱萸を挿して一人を少くを

〔王維〕九月九日憶山東兄弟

というよく知られた詩の結句の趣を踏まえているが、居易が去つて三年たつても、廬山の僧侶たちの結社は存していたことを示していると考えられる。

廬山の仏教を開いたのは、中国浄土教の始祖とされる慧遠であった。我が国で浄土宗といえば、まず「南無阿彌陀仏」と弥陀の名号を唱える法然が想起される。法然は、『選撰本願念仏集』において、中国浄土教の法義を、「謂廬山慧遠法師、慈愍三藏、道綽善導等是也」として慧遠、慈愍、道綽・善導の三家に分類したが、法然の念仏は、直接的には念声を一を主張して称名念仏を唱えた道綽・善導の系譜を引くもので、慧遠とは異なるものであった。慧遠の念仏は、『般舟三昧経』に説く定中見仏を目的とするもので、精神を統一し、想を静めていると、精神が澄み渡つて三昧の状態（定）となり、定中に阿彌陀仏の姿を見ることによって、来世にその浄土への往生を期するものであり、弥

陀の名号を唱えることによって救われる他力の念仏ではなく、心の中で仏を念ずることにより、定（三昧）の境地に入り、見仏、観想に至るといふ自力の念仏であった。精神を統一し、定に入る行といえは、禪である。慧遠は、師道安の影響によつて安高世系の禪思想に深い関心をもつており、弟子を西域に遣わして禪法や戒律を求めさせ、覺賢に請うて、禪經の講義をさせ、晩年には、長安を追われた仏陀跋多羅と門人四十余人を廬山に迎え、請うて『修業方便禪經』を訳出させ、序を撰してこれを讀んでいる。禪定によつて仏身を現前させ、臨終の時に、仏が面前に立つのを拝して、阿彌陀仏の住まう西方の極楽浄土に往生することを願う慧遠の念仏は、禪觀によつて自力で弥陀を觀想する『般舟三昧経』に基づき、初期の禪と浄土信仰が習合したものであった。

慧遠の没後も、彼の法統は脈々と伝えられていったが、時代によつて宗派の変遷があつたにせよ、始祖慧遠に対する深い尊崇は時を超えて引き継がれていった。たとえば、五段階の音声によつて音楽的念仏を唱える五会の称名念仏をはじめた唐代の浄土教家法照は、慧遠への芳躅断ちがたく、廬山に入り、廬山登攀の時に見た夢で、浄土教に造形の深い禪宗の僧承遠に師事することになったといひ、後代、著作の中に慧遠に対する敬慕の念を明記しているという。白居易も、陶淵明と同時代の慧遠に対する崇敬の念は強く、江州司馬時代の廬山に関わる詩及び往時を回顧する詩にしばしば慧遠への言及がみられる。廬山の禪僧にも、慧遠崇拜と相俟つて、西方浄土への往生を否定せぬ一派が存在し、先に挙げた居易の詩はそうした禪僧の存在を語るものであつたといふことができる。

## 二 洛陽の神照禪師と白居易

廬山、東林寺の僧たちと白居易によつて結成された「香火社」といふ名は、開成元（八三六）年、白居易が洛陽の太子賓客分司であつた折、「与今長老振大士為香火之社（今長老振大士と香火の社を為す）」という形で再び登場する（『聖善寺白氏文集の記』・二九四九）。また『旧唐書』卷百六十六「白居易伝」には、「会昌中、請罷太子少傅、以刑部